教育旅行における「平和学習」を考える

戦後70年　座談会

今年は1945年8月15日の太平洋戦争の終結から70年。そこで、高等学校の校長、副校長を務め、平和学習を実際に手掛けてきた現役、OBの方々に集まっていただき、「修学旅行における平和学習を考える」をテーマに意見を交わしてもらった。修学旅行での平和学習の変遷と現状、課題のほか、語り部の高齢化などの課題を抱える修学旅行の受け入れ地の現状などについて語り、今後の平和学習はどうあるべきかを学校、受け入れ地に提言している。

出席者（順不同）

東京都立三鷹中等教育学校長
仙田　直人氏

東京薬科大学客員教授
元都立高等学校副校長
木村　清治氏

前都立石神井高等学校長
竹内　秀一氏

司会・コーディネーター
＝日本修学旅行協会理事長
河上　一雄氏

仙田氏

竹内氏

木村氏

河上氏

生徒に考えさせることが大切だ　仙田

高校教育全体の中で位置付けよ　木村

先生が勉強して生徒のリードを　竹内

受け入れプログラム宣伝もっと　河上

地域と教科書のつながりを示せ　仙田

学校の担当者は現地の人と話を　木村

戦争意識の薄れで平和遠ざかる　竹内

節目の年、平和学習の再構築へ　河上

河上　平和学習は修学旅行の中でかなり前から取り入れられ、先生方は高等学校の教員時代に修学旅行に何回も行かれていると思う。その行き先の中には平和学習の地がきっとあったのでは。そうした経験から、どんなふうに平和学習をとらえているか。以前、東京の都立高校の先生をされていた木村さんから。

木村　振り返ると、1970年頃までは京都、奈良で徹底して文化財学習をやっていた。それが、1975年に山陽新幹線が博多まで通ったことで次第に状況が変わってきた。修学旅行をもう少し遠くで実施しよう、あるいは平和的な学習にしていこうという動きが出てきた。1992年には航空機が認められ、都立高校が十数校参加して沖縄へ行く。沖縄への修学旅行は96年には106校に発展した。物理的に行けるようになったことで、文化財学習からの脱却みたいなものが起こってきた。広島や長崎は地上戦をやっていないので、地上戦を行った沖縄の方に重点が移っていって、1990年代後半から2000年代にかけてはもう圧倒的に沖縄が中心になった。

河上　修学旅行が山陽新幹線の開通や航空機利用の解禁でより遠くへ行けるようになった。それ以外にどうなのか。1955年から「原水禁（原水爆禁止日本国民会議）」の大会が広島で開かれ、同時に「ベ平連（ベトナムに平和を！市民連合）」など平和運動が盛り上がってくる。沖縄は1972年に返還されている。私は、そういう歴史の大きな流れが必然的に平和学習を生み出しているように感じているのだが。

竹内　社会的な動きを背景にして学校の教科指導の中でも、「現代社会」で積極的に戦争と平和の問題を取り上げる、あるいは「歴史」で近現代史を扱う際にその問題を取り上げていった。戦争そのものを知らない生徒たちなので、戦争の実態を知らせる。平和学習という名目ではないが、そういう形で教科の指導のなかで積極的に取り上げられるようになってきた。そして、文化財学習と並行して、原爆の跡や、それを体験した方の話を聞くとか、そういう形でもって修学旅行を考えようというような動きが出てきた。

仙田　中学生の修学旅行先は、東京の場合ほとんどが奈良・京都で、9割を超えている。これは、文化財学習の伝統を踏襲している面が強い。高校における修学旅行では、中学校に引き続き文化財学習を行っていたが、次第に文化財、歴史学習に限らない、いろいろな学習を取り入れるようになってきた。また、今は解消されているが、「日本史」の教科が戦後史までなかなか教えない状況の中、修学旅行において、実体験を踏まえた戦争についての学習を行う傾向もあった。

ただし、修学旅行の内容を考える時に、平和学習だけで終始するわけにはいかないため、歴史的な観光地やその他の学習に適した地があるところと組み合わせる。広島ならば萩、長崎だったら福岡や阿蘇と組み合わせる。沖縄は、その要素がすべてそろうため、沖縄への修学旅行が非常に多くなってきた。

木村　私が務めた高校の中では、平和学習の修学旅行は都立江戸川高校が一番素晴らしかった。特別活動として修学旅行をきちっと位置付けて、特に総合的な学習の時間を使いながら、1年次は自分を見つめるための自己分析みたいなことをやらせて、2年次は平和学習、3年次は進路学習を行った。ホームルームなど学校のさまざまな指導と相まって、平和学習がうまくできていた。

国際問題やさまざまな政治問題もからむので大変だが、高校教育全体で特別活動の中に平和学習を位置付け、深い知識を持って、学校長以下、現場がきちっとした姿勢で取り組むことが重要だ。

河上　平和学習は今後も大事だが、今、たいへん大きな問題が出てきていて、例えば、沖縄の「ひめゆり平和祈念資料館」では語り部の高齢化で3月末をもって語り部の話がなくなった。この話は広島や長崎でも出てきている。今までのように語り部の話を聞くという体験ができなくなったとき、受け入れ地にはどういう平和学習を出してもらいたいか。

竹内　新しい取り組みとして、長崎では「ピースボランティア」という形で高校生ら若い人を中心にして平和活動を継承しようという動きがある。そういう人たちとの交流を通して、生徒たちにも、自分たちと同年代の彼らがなぜそうした活動をしているのかを知ってもらいたい。そういうなかで生徒たちの意識も変わっていくのではないか。

広島では「平和クリエーター」になろうということで、原爆の資料館や史跡などを見た後に集まって、コーディネーターのもとで1時間半ぐらい感想を述べて、自分たちが実際にどんなことができるのかを話し合っている。受け身だとどうしてもやらされている感があるので、主体的に自分たちができることを考えていく場を作っていかなければならない。

木村　語り部はどんどん高齢化しているから、語り部の継承者を育てなければならない。戦争当時をすべて知っている人間はいないのだから、戦争のことをきちっと伝えていくというある種の技術を持った人たちを養成するべきだ。戦争を体験したわけではないのに、素晴らしい話ができる若いガイドもいた。生徒たちもその人の話はしっかり聞いていた。

高校の修学旅行の担当者は、事前の下見に行っても、現地のどの辺が危ないか、ホテルの状態はどうか、といったことだけ調べて終わってしまう。そうではなく、管理職も含めて担当者が現地の人たちとしっかりと話をすることが重要だ。逆に、受け入れ地域の人たちは、学校の先生に生徒の状況を聞きながら、互いに平和学習の内容を決めていくのが好ましい。

仙田　これから先、語り部がいない状況があるのなら、今後は広島、長崎、沖縄に限らず、どの地でも平和学習ができるといった提案をしてもらっても良い。その結果、学校も新しい平和学習の行き先を広げて考えることができる。

3月10日は東京大空襲の日で、都立高校では「東京都平和の日」として、黙祷させた。三鷹中等教育学校では黙祷するだけでなく、私が朝の放送で生徒全員に3月10日の意味を語った。三鷹市新川で一番空襲が激しかったのは5月25日であり、3月10日に限ったことではないことも話した。近くの公園にあるプラタナスは、被災したにもかかわらず、今でも青々と緑を生やしている。その姿から、戦争の悲惨な状況を生徒たちに学んでほしい。学校が普段からこのように平和学習を取り入れていれば、修学旅行先がどこであっても平和の意味を考えることができると思う。

竹内　先ほど話があったが、現地の人と学校とが十分にコミュニケーションをとって、そこで平和学習をどういう形で展開するのかを詰めてほしい。そのためにはもっと先生たちが勉強しなくてはいけない。沖縄での修学旅行の場合、東京都では2泊3日が非常に多い。その典型的なパターンは、沖縄にはたくさんの戦跡があるにもかかわらず、ひめゆり平和祈念資料館に行って、ガマに入っておしまい。半日しか平和学習を行わない。それでは、沖縄の方々が用意しているものと学校側が現地に行って見るものとのズレがあまりにも大きい。本当に平和学習をするために沖縄に行っているのか疑問がある。生徒たちを指導していく側がもっと勉強して、そして生徒たちをリードしていく。沖縄や広島・長崎など、そこで何を学ぶのかを見つけ出していかないと実にならない。

河上　受け入れ地の発信の仕方の問題がある。沖縄は平和学習のプログラムも資料も大変素晴らしい。沖縄では平和学習の教材がいっぱい売られていて、コンビニでも売っている。だが、本土から行った先生方はそういうものを見ない。地元教材に何があるかをもっと強く発信してほしい。

東京でも、一部反対はあるだろうが、見学で九段の靖国神社の「遊就館」にも行ってもよいと思う。このように、全国各地に平和学習ができる施設がある。だから、受け入れ地がプログラムや施設をもっと学校に強く宣伝することが今後必要だ。

仙田　靖国神社の遊就館には、「対馬丸」のコーナーもあって、その状況の詳細が分かる。近くには、傷病兵への理解を促す「しょうけい館」や国民生活の悲惨さを展示した「昭和館」もある。東京ならば、それらを組み合わせて、平和学習を行うという方法も考えられる。

私が、東京都教育委員会にいた時に「江戸から東京へ」という本の作成を担当した。この本では、各項目の冒頭部分に「学びの窓」という問いかけのコラムを置き、生徒たちにまずはさまざまな疑問を持ってもらう工夫を行った。例えば、沖縄では高校生向きの歴史の本はあるが、生徒への投げかけを行う教材が少ないと感じる。沖縄も広島も長崎も教材にもっこのような工夫を取り入れてほしい。生徒に考えさせることがとても大切だ。

木村　私は大学の教員養成を担当しているので、その話をしたい。文科省の意向もあるのだが、教員を目指す学生にもう少し勉強させたいということで「教職実践演習」というのが設けられた。これは大半の学校は4年生に置いている。教員の仕事は教科だけではない。先生になった時にホームルームや修学旅行をどう導くのかといった訓練もやっている。教職実践演習は教員になる人間をもう一回鍛え直すという意味では課題解決学習的な要素もある。大学の立場から言うと、このところかなり頑張って教員養成をしている。だから、今後、高校教育にそういう良さが出てくるのではないか。

河上　新しい学習指導が出てきて、これからの教育の大きなテーマになっているのが課題解決学習だ。その中で、平和をいかに構築するかということも現代の問題として捉えられる。現場を見たり現地の人と話したりできる修学旅行は、その問題を解決する手立てとして使える。平和学習は今後も続けていくべきだ。地元でもできるが、受け入れ地はここに行かないとできない平和学習にしてほしい。例えば、約60万人の旧ソ連などからの引揚に関わる港で記念館のある舞鶴などがある。受け入れ地に対して、こんな工夫をしてほしいという注文はあるか。

仙田　修学旅行の受け入れ地側で、その地域の歴史と生徒たちが使う教科書に載っている歴史がつながっていることを示してほしい。そして、教科書に載ることを地域教材で具現化するためには、現場の教員に学校で教えていることを聞いてもらいたい。歴史の資料集に自分の地域がどのように紹介されているか、分からない状況もあるはずだ。一度学校の教材を見てもらえれば、うちの地域ではこんな関連のものが見せられる、こんな課題解決学習ができるという提案につながると考える。広島、長崎、沖縄以外の場所でも、このような提案ができれば、学校もそれは面白い、そこでやろうと思うのではないか。

竹内　まさにそうだ。広島や長崎などがどんなパンフレットや資料を作っているのかを調べてみたが、相当充実している。ただ、残念ながらそれが学校の中で使われていない。さっき言ったように教員の側がそれを使うだけの力量がない。もう一つは仙田さんが話したように、広島や長崎、沖縄などが作っている資料と教科書との乖離がある。先生たちは勉強したいという気持ちは確かに持っているが、本当にたくさんの仕事を抱えていて修学旅行だけを考えるのはなかなか難しい。生徒が学校の中でどういう形で戦争や平和について学んでいるのかを十分吸収して、それに合わせる形で資料を作ってもらえたらうれしい。

河上　日本修学旅行協会ではいろいろなパンフレットを作っている。そういうものを作ったときに各県なり市町村なりの教育委員会に、これが学習指導要領の上でどうなっているのか目を通してもらっている。自分たち独自に作るのではなくて、そうすれば先生たちが乗ってくる。学校の修学旅行、教育旅行を誘致するのであればそういう視点が必要だ。

木村　教育行政全体のありようと高校現場は非常に絡んでいるので、もう少し先生が自ら学んで研修できるような体制を東京都など行政が取ってほしい。先生は元々勉強したいと思っている。管理職としては、信じてやって頑張らせるとけっこう頑張るので、もう少し教育環境や研究環境が良くなってくるといい。

先ほど現地との関係で事前の打ち合わせが足りないという指摘があったが、管理職として、そういったことができる人材をいかに育てるか。私は東京都教育委員会や日本修学旅行協会の援助を受けながら、いい教員を1人ではなく2人3人と育てていきたい。

仙田　平和学習に関して、学校で教える素材は、地域によって多少異なる。例えば、沖縄から東京の学校に対して、教科書に載っている素材が沖縄にはこのようにあることや、沖縄と結びつけることができる素材が東京にも多くあることを示す。学校もそれならば、幅広い視点から学習できると考え、候補地とする。さらに学校は、多くの教科が時間をかけて事前学習を行うこともでき、学習はより深化したものとなる。

河上　山陽新幹線の開業あたりから平和学習がぐっと盛り上がってきて、今、風化しつつある。今ちょうど戦後70年という節目の年、日本人は平和ということに対して基本的に考えていかなければならない。平和学習も再構築するべき時期だ。また、語り部の高齢化も進んでいるから、従来通りにはいかないだろう。だから受け地も学校教育のあり方を踏まえたうえで、われわれ学校側と一緒に手を携えてやってくれるとすごく未来が開ける。また、現代の問題の解決にもなる。

竹内　生徒たちにとって戦争は段々に形だけのものになっている。生徒が知っている戦争は、報道で伝えられる戦争、そしてゲーム。本当に身近なものとしては捉えがたくなっている。意識の希薄化、あるいは風化が進んでいる。だからこそ学校としては、逆に平和学習をもっと積極的に進めていくべきだ。学校での教育と現地の伝えたいものがもっとリンクしていけば、平和学習はもっと充実したものになる。それをやっていかないと平和そのものが遠ざかってしまう。だから、改めてどうあるべきかを考え直して、新しい平和学習を作っていく必要がある。

河上　日本にとっても学校教育にとっても平和学習というのは将来的に非常に大きな意味を持つ。修学旅行での平和学習も大きな意義がある。行き先はどこでもいいわけだが、取り組む問題によっては特化したところに行かなければいけない。そういう中で、ぜひ受け入れ地は時代の流れを読み、教育を十分に踏まえた上でプログラムを作り、受け入れを促進してもらいたい。